

八重山のカママーリに関する一考察：波照間島の事例から

古谷野，洋子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

275

(終了ページ / End Page)

316

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007273>

八重山のカママーリに関する一考察

—波照間島の事例から—

古谷野 洋子

1. はじめに

沖縄一帯では一〇月から一月になるとカママーリの行事が行なわれた。¹⁾一七二三年に琉球王国によつて製作された『琉球国由来記』には、王城之公事として「十月朔日竈廻」の記述が見られる。この行事は王城のみではなく各地で行なわれていた。沖縄島周辺の島々（伊江島、粟国島、渡名喜島、慶良間島、渡嘉敷島、久米島）でも、「十月朔日竈廻」では、火の用心の為に家々を掃除させ、役人が村廻りをして家々の竈を見届けたと記されている。宮古島では、「十月中、火用心タカベ之事」として、「諸村村々ヨリ御花取り、ツカサ、村サバクリニテ其村嶽嶽へ祭り上げ、冬中火難アラセタマ

フナト、祈願申也」と記されている〔外間・波照間編 一九九七 四八三〕。同書の八重山の項には、「十月夕カベ之事」として、「由来ハ、為火用心竈廻仕リ 頭数一人二付、米五勺宛出合せ、嶽々へ祭申也」と記されている〔外間・波照間編 一九九七 四九七〕。

前述の記録は琉球王国の時代の記録であるが、カママリーは近代においても行われていた。『那覇市史資料篇 第二巻中の七 那覇の民俗』（以下『那覇市史』とのみ記す）によると、かつてカママリーには村頭や村の主だった年寄りたちが火の用心をするように各家々の竈を一軒一軒注意して廻ったが、このころから「ニシブチ」（東北季節風）が強くなり、火災が多くなるからであるという〔那覇市企画部市史編集室 一九七九 五四四〕。

本稿は八重山のカママリーに関する一考察である。筆者は拙稿「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役―石垣島大浜のサリサリコンコンを中心に―」（二〇〇七年）の中で、石垣島（大浜・伊原間・川平）や黒島・波照間島における聞き取り調査から、八重山において、ミノ・カサ・ツエのいでたちで、「サリー、サリー」「オッサレー」「バンドッサレー」などと唱えながら夜廻りするものを、「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役」と呼び、この行事は沖縄一行に行なわれていたカママリーの行事の一環であったことを報告した。カママリーは単なる火の用心ではなく、琉球王国の権威と結びついた行事であったと考えられ、八重山におけるカママリーも王府の指令であったと考えられる〔古谷野 二〇〇七 一一一〕。八重山は約二五〇年間にわたって琉球王国の直接支配を受け、祭祀・信仰においても干渉、介入を

受け続けてきた。³⁾ 琉球王国の歴史書である『球陽』には、「宮古・八重山島は遠く海外に有り、俗習甚陋にして、愚民尤も多し」と記されている（球陽研究会 一九七八 二四三）。この記述には中国文化を国家経営の理念として取り入れた琉球王国が宮古・八重山をどのように見ていたかが如実に現れている。しかし、宮古・八重山には宮古・八重山の信仰があり、それぞれの信仰習俗が行われていたのである。王府の指令であったカママーリの行事は従来からあった八重山の信仰習俗と結びついて人々に受容され、さらに時代とともに変化してきたと考えられる。

前述の『琉球国由来記』や『那覇市史』の記述からは、カママーリとは役員が集落中を廻り家々の竈を見届けたものであると考えられる。しかし八重山においては、カママーリは川平・伊原間^{かひら いはらま}では種子取^{にぎぎ}の夜、大浜では節祭^{しつまつ}の夜、波照間島ではカンパナの夜という特別の行事の夜に行われ、その夜は家では灯りをつけてはいけない、廻ってくる人の姿を見てはいけない、返事をしてはいけないというタブーがもうけられていた。この行事は、魔除け、村の清め、子供の教育とも言われ、体験した人々は「子供時代は怖かった」と口々に語る。八重山におけるカママーリはどれも単なる火の用心の行事ではなかったようである。前述の拙稿では、王府の指令によるカママーリの行事は、それまで行なわれていた火に関する神事儀礼と結びついて受容され、精進を伴う特別な行事として、「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役」の行事として行われるようになったと考えられると述べた。筆者は、それまで行なわれていた火に関する神事儀礼として節祭や種子取に行われた火の更新の儀礼を挙げたが、火の更新

の儀礼が実際どのような儀礼であったのかについては今後の課題であると述べた。

しかし、「王府の指令によるカママリー行事は、それまで行なわれていた火に関する神事儀礼と結びついて受容された」という結論は、あまりにも性急過ぎる結論であったのは否めない。また、聞取り調査のみでなく実際の事例から行事の詳細を検討することも必要であった。

では、現在、八重山においてカママリーは行われていないのだろうか。大浜、伊原間では戦後、何回かは行われていたようであるが、この行事について記憶している人々は七〇〜八〇代の人々のみである。川平では「年に二六回も行事があるので、遺すものは遺そうということになって行事を選んだ」といわれ、年中行事の取捨選択の結果、オッサレー（川平ではカママリーのことをオッサレーという）の行事は約四〇年前に廃止された。オッサレーの唱えごと（あがりごと）に使用される言葉が川平の方言ではない、ゆえに本来の川平の行事ではないということもこの行事が廃止された理由らしい。筆者の黒島における調査では、仲本集落では昭和一〇年代くらいまで、東筋集落では昭和三〇年代までは行われていたようである。このように八重山ではカママリーはほとんど廃止され、すでに半世紀はたっている。しかし、波照間島では今でもオッサレーと呼ばれるカママリーの行事が一月から二月にかけて行われている。本論は八重山で唯一現在でも行われている波照間島のカママリーについての報告と若干の考察である。

なお、本稿における表記について述べる。八重山地方、八重山諸島は八重山と基本的には統一して

表記する。竈廻り、カママーリ、カママーイ、カママールはカママーリと統一して記す。なお、川平、伊原間ではカママーリの行事をオッサレーと呼んだが、波照間島ではオッサレーあるいはオーサーレーと呼んでいる。⁶⁾ 本稿ではオッサレーあるいはオーサーレーをオッサレーと統一して記す。ただし、波照間島ではオッサレーにはカママーリ以外の意味もあるので、本稿では特別な場合を除いてこの行事をカママーリと記す。台所に祀られる火の神は、波照間ではピナカン、ヒヌカンと呼ばれるが、便宜上ヒヌカンと統一して表記する。また、土の神、地面の神、地の神は地の神と便宜上統一して表記する。また、蓑・笠・杖はミノ・カサ・ツエと統一して表記する。しかし、引用文献、聞き取り等においてはそのままの表記を使用する。

なお、波照間島の調査は二〇〇四年から行っていたが、カママーリの実際の調査は二〇〇八年一月二十九日に行った。

2. 波照間島のカママーリの記録と言説

波照間島は沖縄県の最南端の八重山諸島に属するが、石垣島・西表島の間⁷⁾に点在する竹富島、小浜島、黒島、新城島とは少し離れた遠方に位置する。隆起サンゴ礁によって形成された島であり、昔は米や粟を作っていたが、現在は耕地のほとんどがサトウキビ畑である。かつては約二〇〇軒あった農家の

殆んどがサトウキビの栽培をしていたというが、過疎化と住民の高齢化のため現在のサトウキビ農家は約一〇〇軒ほどであるといわれる。また、空き家も目に付く。実際は石垣島や沖縄島に住んでいて特別な行事のときに帰ってくるだけという家もある。

波照間島には外、^{ふか}名石、前、南、北の五集落があり、住民は集落を部落と呼んでいる。よって本稿の記述においても一般論以外の場合はそれに従う。

(1) 波照間島のカママーリの記録

波照間島の民俗誌としては、宮良高弘『波照間島民俗誌』（一九七二）、加屋本正一『波照間島』（一九七八）、コルネリウス・アウエハント『H A T E R U M A — 波照間・南琉球の島嶼文化における社会Ⅱ宗教的様相—』（二〇〇四）が挙げられる。アウエハントの著書の出版は二〇〇四年であるが、一九六五年に行われた一連の調査をもとにしている。カママーリについては宮良と加屋本は記しているが、アウエハントの著書には記述がない。さまざまな年中祭祀が記されているアウエハントの著書になぜカママーリの記述がないのかは不思議であるが、波照間の年中祭祀を農耕儀礼としてまとめた彼の編集方針からカママーリははみでたものだったのかもしれない。⁸⁾

宮良高弘は『波照間島民俗誌』のなかで波照間島の年中行事を、①神行事 ②家単位の行事 ③その他の行事にわけ、カママーリを③の「その他の行事」に分類した。③の「その他の行事」とは、御

嶽を中心に島を挙げて挙行されるものでもなければ、各家ごとに行われるものでもない行事のことである。カママーリの行事は部落全体を代表した役員が全戸を巡って行うものであり、御嶽の祭祀者であるツカサは関与しないからであるという。宮良高弘の報告した名石部落のカママーリの内容を次に要約して記す。

まず当家の主人は自分の所属する御嶽の井戸から水を汲み、火の神（竈）の裏側に置き、それに藁で箒を作つて入れておく。部落の幹部と祈願する人（巳年生まれ）、お供（杖もち）が集まり、住民が寝静まつた頃、まず、御嶽で「今日は正月竈廻りですので、良い祈願をさせてください」という内容の祈願をした。⁹その後、トウニムトウの家から祈願を始める。お供は道々杖でコンコン音を立てて「オースサーレー、オースサーレー」といいながら通る。門に入ると掛け声をとめて、火の神のそばに用意されているものを敷いて、願う人はその上にひざまづいて「オースサーレー、オースサーレー」と唱えてから祈願する。祈願の内容は、「大きい門、高い門にいらつしやる親神様、家の四角にいらつしやる親神様、屋敷内にいらつしやる親神様、今日は十月竈廻りであるから、竈の掃除をさせてください。フタル（あか）もノリもつかずに、鏡のように水のように清らかにさせてください。今年一年を守ってください」である（宮良 一九七二 一七五〜一七七）。

加屋本正一『波照間島』では、カママリーは火の神祭りであり、一〇月のミヨクチエの晩に火事なきよう神に祈る行事であるという（加屋本 一九七九 一六二）。加屋本は北と南部落の例を挙げ、当家の主人が自分の所属御嶽の井戸から水を汲み、ヒヌカンの元においておくと、部落の幹事が二人の寝静まった頃、道々棒でコンコンと音をたて、「オースサレー、オースサレー」といいながら廻るといふ。この掛け声は、道々人に出会わぬよう、灯りをともしている家があれば灯りを消すようにとの掛け声であるという。門に入るとこの掛け声は止まり、願う人は「ピナカンヨ（火の神様よ）、キューヤジングワツヌカママリーヤリバ（今日は一〇月カママリーの日に当たり）、カマヌソオジシタボリ（籠を守ってください）」と祈願するという。

宮良賢貞は波照間島の一〇月タカベの行事である「オウヒサレー」（オツサレーのこと…筆者）について、「大正の中頃までは、水性の人が夜おそくミノ、久葉笠姿で、神に扮し右手にアティクの棒を持ち、家々のかま廻りをして、呪詞を唱えて歩いた」（宮良 一九七三 一三〇）と記している。しかし、現在ではオツサレーはそのようないでたちでは行われていない。そればかりか、ミノ、クバガサ姿で行われていたということさえ伝承している人もいない。波照間島ではミノ、クバガサ姿はアメニゲー（雨祈願）のときのいでたちであり、オツサレーではそのようないでたちはしないという。

二〇〇五年に筆者は勝連文雄氏（大正六年生まれ 南部落）からカママリーについて聞き書きを行った。¹⁰ 氏の語るカママリーは、二人の役員（その役員は水性の人である）が家々を廻り、そのとき一人

が道々杖でコンコン音を立て、「オッサレー、オッサレー、オッサレー」という掛け声をたて、願う人が籠の廻りや火の神のそばにひざまづいて祈願したという。氏の語るオッサレーの基本的なやり方は宮良高弘や加屋本の報告とほぼ同じであった。また、加屋本の記したように、この行事は灯りを消して行われるということも同じであった。そして、カママーリの目的について氏は、「寒くなる人間は熱を貰う。炊事場は火を使う。炊事場に向ってやって来て、火の神、土の神にオッサレーと声を掛け、火の用心を願う」と語った。火の神の前で火の用心を願うのはわかる。しかし、なぜ土の神（地の神）に火の用心を願うのだろうか。この疑問には氏は答えてくれなかった。

(2) カママーリを巡る言説

波照間島ではカママーリの行事はオッサレーといわれるが、実は、カママーリの際に家々を廻る役員のことオッサレーと呼ぶ。二〇〇八年、崎山千代氏（大正七年生まれ 北部落）はカママーリについて次のように語った。「オッサレーがよー、部落みんな廻る。人のうちみんなだよ。不幸のあるうちはやらんけど」。つまり、この行事は不幸があった家以外は必ず行う部落あげての行事であることがわかる。現在、北部落と南部落はこの行事を合同で行っている。「やる人がいなくなったので、役員がやろうということになった」と勝連隆生氏（昭和二二年生まれ 南部落）はいう。水性（巳年生まれ）の決まった人が以前はやっていたが、その方が亡くなったので部落の役員がやることになっ

たというのである。約一〇年前にオッサレーの役をやったという勝連隆生氏からの聞書きを記す。¹⁾

夜、一一時頃から始まります。大体、四〇分くらいかかります。南は部落全部で三〇軒ないよね。居る家だけだから。カマ使つてないところはやる必要ないから。灯り点いてるところもやる必要ないから。叩いてもわからんところ、そういう家もあります、酔払つていた家だつたとか、知らなかつたとか、前にいわないし、連絡もしないから。だから叩くわけよ、トントントンと。夜、棒で道を叩きながら行くのはそれひとつしかないからわかります。それを聞いたら火を消しなさいという意味ですから。事前に伝えないけど、前もつて一年分のプリント渡してありますから。年寄りのいる方はほとんど知っていますよ。それを知らないでいる人もいますよ。それはそれがかまわない。しかし、知らないで文句いったりしてはいけません。やつている人に話してはいけません。怒つてはいけません。今まではそういう例はないけど、そういう人がいて、その家火事になつたという話があります。

門から入つて、夜一二時過ぎて、棒叩きながら、それは灯りを消しなさいという合図なのです。灯りが点いていたら門で消すまで叩いている。消さなかつたら他の家に行く。地面にお尻上げて、頭下げて、「オッサレー、オッサレー、オッサレー」これは、神さまに呼びかける言葉、火の神さまだね、「ジュンガツ、カジマーリアタリ、カマノマワリ、ソウジシタボリー」、カマドのどこ

ろにピナカンってあるでしょ、今はコーロだけ置いてあるけど、昔は石を三個、カマド載せられるような格好なんですけど、それを押んでいただけですよ。

勝連隆生氏の語るようにカママーリの晩はどこの家でも電気を消す。若い人は、「子供のとき、かちゃんには寝なさいといわれたが、真つ暗な中、意味がわからない唱え事が聞こえてきて怖かった」という。年配の人も、「暗い中、ゴンゴン音がしてやってきて俺も怖かったな」という。電気をつけてはいけないというタブーとともに、覗いてはいけないというタブーも存在する。崎山千代氏は「音が聞こえたらどこかに隠れてみれ」といいながら、別のときには「絶対に覗いたらだめだよ」という。オッサレーはあくまでも見てはいけない行事であり、間違つて見てしまったら御嶽にいつて詫びを入れなければならなかったとも言われている。しかし、子供の頃に雨戸の隙間から覗いたことがあるという人もいるので、実際にはこっそり覗くことはできたようである。

なお、今回の調査で勝連文雄氏に再びカママーリの目的を訊ねると、「カママーリでは、火の用心によつて炊事場の竈を中心とした家族の健康とホウツク（豊作）を祈願する」という。カンパナの日、昼間は部落の御嶽でツカサが人々の健康と繁栄を祈り、夜はカママーリによつてその家の繁栄と家族の健康を祈願するのだという。

3. カママリーの実際

現在、波照間島ではカママリーはどのように行われているのだろうか。二〇〇八年度の波照間島における観察と聞き取り調査から記す。

(1) カママリーの行われる日

波照間島の神行事は一年を三分して行われている。一連の神行事の始まりの日をミヨクチェという。ミヨクチェは年に三回あり、六三〜七三歳までの老人たちによる御嶽の掃除の日である。八重山の一年の行事は一〇月から一月に行われる節祭に始まる。波照間島では節祭のあとの最初のミヨクチェの六日後に麦と早蒔き粟の播種のための新たな祈願が行われた〔アウエハント 二〇〇四 三七三〜三七四〕。

カママリーは一月から一二月にかけて行われる最初のミヨクチェの次の日、カンパナの日、夜の夜に行われる。この時期は、風が吹き、気温も下がり、波照間島でも暖房が使われる時期である。昔は茅葺の家が多く竈だったので火事も起こりやすく、風の強いこの時期には特に火事が起こりやすかったのではないかと島の人はいう。

勝連隆生氏は「オッサレーをやる日は神行事のカンパナの日なんですよ。カンパナの日には御嶽を掃

除するミヨクチェの次の日です。でも、カンパナの行事とその夜行われるカママーリは全然違うんです」という。確かに、カンパナの行事はツカサの行う御嶽の行事であるのに対し、カママーリにはツカサの関与はないし御嶽で特別に祈願が行われるわけでもない。前部落のツカサ経験者である山田茂氏、外部落のツカサ経験者である西島本千代氏の二人も、カママーリはツカサの行事とは関係ないと語る。

波照間島の御嶽は“ワー”と呼ばれ、各部落にある御嶽を“部落のワー”、部落から離れた森の中の御嶽を“畑のワー”という。“部落のワー”は“畑のワー”へのお通しのためのワーであるといわれている。“畑のワー”は鬱蒼とした森になっていて、年三回の掃除の日（ミヨクチェの日）以外は立ち入ることはできない。ただし、ミヨクチェの日は島外に住むものも“畑のワー”の中に入って見学することができる。筆者の調査した南部落の“部落のワー”はアリントワー、北部落の“部落のワー”はミシユクワーであり別々のワーだが、“畑のワー”は両部落ともシサバルワーである。そのため、“畑のワー”の掃除は両部落の人々によって行われる。“畑のワー”は何町歩という広さであり、内部には広い洞窟がある。“畑のワー”の掃除は枝の伐採から始まり、外周道と中央道を含めた道を掃除して、伐採した木で豊年祭に使用する薪を作っておく。ミヨクチェの日にはツカサが“畑のワー”まで行って願いをする。現在、南部落にはツカサがいないので、役員の婦人がツカサかわりに祈願を行っている。

ミヨクチェの翌日のカンパナも年に三回行われる。カンパナの日には、「カミノジョウノウ」といわれ、七く七三歳までの部落の人々が五勺米を拝所の神さまに上納する日であり、健康と安全を願ってもらおう。⁽¹³⁾現在、南部落では、カンパナの日の午前中に、部落のワ―で役にあたった二名の婦人が供物を供え祈願をするだけである。その日、男性の行う仕事は特にならない。

では、家庭においてカママ―リ当日の準備はどのようにするのだろうか。崎山千代氏は「自分の家で拝んでいる御嶽の井戸あるさね。井戸から水汲んできて、ヒノカミにも水入れて、前にムシロも敷いてやるさ」という。所属する御嶽の水を汲んできて、ヒヌカンの前にその水の入った容器を置き、台所の前の庭に敷物を敷いておくというのである。⁽¹⁴⁾夕方、筆者が近所の家をみると台所の前の庭にダンボールが敷いてあった。しかしこのような敷物の準備をしていた家は少なかった。



台所の前に置かれたダンボールの敷物

(2) カママーリの準備

カママーリは夜中に行われるため、午後一〇時頃から集会所に部落の役員が集合する。役員は部落の役員であり公民館の役員とは関係がない。北部落と南部落のカママーリは共同で行なわれる。そのため、北部落の役員も南部落の集会所に集合する。北部落と南部落は隣接した部落であり、盆の行事のムシャーマも共同で参加している。

集まった人々は約八人、北と南の部落の役員である。当日の準備としてはトウム（供）の持つ太くて長い棒（ツエになる）と、タチグシンと呼ばれる御神酒を用意することくらいである。カママーリについては半年間の行事計画表が各家庭にすでに配られているので、事前になってからの連絡は特にしないという。¹⁵⁾

集会所の右側にはタチグシン（銚子が二本）と塩と盃の載った膳が置かれる。¹⁶⁾ 役員たちは集会所に集まったらまずこの御神酒をいただき、その後、泡盛やビールを飲みながら一二時が来るのを待つ。お酒を飲みながら雑談しながらの和やかな雰囲気である。家々を実際に廻るのは、願い事を唱えるネガイピトとトウムである。¹⁷⁾ 南部落のネガイピトとトウムは経験者であったが、北部落のネガイピトは初めての人だったので、先輩たちに指導されカママーリの唱えごとの練習をしていた。唱えごとは、「オッサレー、オッサレー、オッサレー、オッサレー、キユウカラジュンガツカママーリアタリ、カママーリノソウジ

シタボーリー」である。その内容は「オッサレー、オッサレー、オッサレー、今日から一〇月カママ
ーリにあたり、竈の周りを掃除してください」である。

練習の後、南部落のネガイピトをやる先輩から各戸を廻る際の次のような注意を受けた。

① 灯りが点いていたらやらない。その場合はツエで入り口の地面を叩く、ツエで叩いても灯りを
消さなかつたらその家はやらない。

② ヤーモト（部落の宗家）から廻り始める。

③ 新宗教の家はいかない。

④ ヒヌカンに一番近い三番座の前でやる。しかし台所が東側にある場合もあるので注意をするよ
うに。¹⁸⁾

⑤ 人が住んでいなくてもヒヌカンと仏壇があればやる。

⑥ スーイベの家はやらない（白い位牌の家はやらない。つまり、葬式後四九日以内の家はやらな
い）。¹⁹⁾

ネガイピトとトウムの特別な服装はなく普段着で行う。筆者の調査したのは一月二十九日であり、
風が強く吹き高速船も欠航が続いた時期で、気温も低く、ネガイピトはジャンパーの下に何枚も重ね
着をしていた。

(3) ネガイピトとトゥムの巡行

家々を廻る順序を北部落と南部落で相談したあとタチグシンの御神酒と塩をいただき、一二時前に両部落のネガイピトとトゥムの二人一組がカママーリに出発した。あとの役員はお酒を飲みながら集会所で待つ。しかし、後にカママーリのツエの音が聞こえたら電気を消した。以下は、筆者の観察とカママーリのネガイピトとトゥムをはじめとする役員の方々からの聞き書きで構成した南部落のカママーリの報告である。

南部落の一行は部落の御嶽であるアrintワーの手前で手を合わせてからカママーリを始める。最初にヤーモトを訪れ順次各家を廻る。すでに多くの家では電灯を消して雨戸を閉めている。²⁰この季節は夜空いっぱい星が見えるので、たとえ家々の灯りが消えていても真つ暗というわけではない。路地に入ると暗いが、暗い中では目が慣れてくるという。トゥムは棒をツエにして、カーンカーンと地面に力強く打ち付け音を立てながら歩く。私語は慎む。宮良高弘によると「お供は道々杖でコンコン音を立ててオースサーレー、オースサーレーといいながら通る」とあるが、実際には道中声を出すことはない。

夜間、棒で地面を打つ音は響く。カーンカーンという音を聞いてあわてて灯りを消す家がある。総務の方たちによると、昔は道路が舗装されていなかったもので、かえってズーンズーンと家の中まで音

が響いたという。「こんな大きな木でドンドンとつくさね。夜遅いよ、寝てるよ、でもわかるよ。あの音聞いたらすぐ起きるよ」と崎山千代氏はいう。「雨戸が開まつていても灯りが隙間から漏れているので、電気が点いているかどうかはわかる。灯りが点いていたら門で消すまで叩いている。消さなかつたら他の家に行く」とネガイピトやトゥムを務めた方はいう。地面を叩くのは灯りを消しなさいという合図になるのであろう。しかしネガイピトやトゥムを務めた方によると、「音を立てることによつて寝ている地の神様を起こす」のだという。話者によつては、土の神様とも地面の神様ともいう。

音を立てながら家の前まできたらツエを叩くのをやめる。ツエを叩くトゥムは門の中に入れない。トゥムはただ叩くだけであり、ネガイピトは願うだけで、一切ものをいつてはいけない。ネガイピトだけ庭に入つていき、三番座の前に膝まずいて手を地面につけその手の上に口を寄せて唱えるが、このときできるだけ体を地面に近づけて唱えるという。地の神は地面のずーと下において耳が遠いので地面にできるだけ近づいて大声を出すのだという。南部落は三〇軒弱であり、行事は一時間ほどで終わった。帰つてから再び御神酒をいただく。その後、役員全員で御神酒がなくなるまで飲まなければならぬ。

他部落のカママーリはどのように行われているのだろうか。翌日、外部落でトゥムを務めた方にお聞きした。外部落でも三年前までいつも決まつた人がやつていたが、その人がなくなつたため現在では部落の役員が交代でやつているという。トゥムを務めた方は、「ツエで叩く役だつたが、叩くだけ

でも腕が疲れた」と語った。外部落でもツエで地面を強く叩いたのであろう。

4. 波照間島のカママーリの考察

南・北部落の合同カママーリの事例からではあるが、波照間島のカママーリについていくつかの視点から考察する。

(1) カママーリの行事の性格―諸注意の分析を中心に―

まず、北部落のネガイピトが先輩から各戸を廻る際に受けた注意について考えてみたい。

① 灯りが点いていたらやらない。

八重山の中心である石垣島に電力の供給が始められたのは、昭和二年（一九二七）であり、それ以前はランプが使用されていた〔石垣市史編集委員会 一九九四 三九一〕。勝連文雄氏によると波照間島で本格的な電力の供給が始まったのは戦後のことだという。家に明かりがついているということは、昭和前期まではランプに火を灯していたことを意味する。深夜はカマドで煮炊きも終わった時間帯である。つまり、かつてカママーリの行われる夜は家の中で火を使うことは禁止されていたのである。

- ② ヤーモト（部落の宗家）から廻り始める。
沖繩の神行事の多くはいまでも、トネムトウ、ヤーモトなどと呼ばれる集落の草分けの家から行われる。この場合もその習慣に従ったものと考えられる。
- ③ 新宗教の家はいかない。
沖繩では従来の年中行事のほとんどは神行事と結びついている。そのため新宗教の中には従来の年中行事に対して否定的な考え方をするものもある。これは新宗教の家のほうからの要望であると考えられる。
- ④ ヒヌカンに一番近い三番座の前でやる。
カママリーは台所のヒヌカンに向かって祈願するということが確認される。
- ⑤ 人が住んでいなくてもヒヌカンと仏壇があればやる。
人が住んでいるに因らず、ヒヌカンと仏壇があれば祈願が行われるということがわかる。本来、この二つが残っている場合は家の持ち主が帰ってくるということを意味しているという。
- ⑥ スーイベの家はやらない。
つまり、死者が出て四九日以内の家は行わないということである。波照間島では四九日がおわらないうちはいつさいの神行事に参加しないという。

①からは、電気がなかった時代には、カママーリの夜は部落中が火を消していなければならなかったことがわかる。これは、節祭などの特別な夜に行われていた精進に通じる行いである。精進の夜、火を消した事例は八重山にいくつかみることができる。川平では節祭の初日は、初夜、精進夜ともいわれ、日没後はカマドの火を消し、精進を守ったという〔湧上 二〇〇〇 二七三〕。波照間島では精進をソーズといった。勝連文雄氏は「ソーズっていうのはね、神様に対して静粛にすること。おざっぱじゃないよ、ソーズっていうのはつとめといって、今はソーズの時間だからというともものも言わない、音もださない、シーンとしている」と語る⁽²²⁾。前述のオッサレーに関する言説に「覗いてはいけない」(崎山千代氏)、「やっている人に話してはいけない」(勝連隆生氏)というタブーがあった⁽²³⁾。カママーリの夜はカマドの火を消して勝手な行動や私語を慎む精進の夜であったと考えられる。カママーリの夜が本来、火を使うことを禁じた精進の夜であったと考えられることは、『琉球国由来記』の竈廻の記述からも推測できる。同書には「一〇月一日竈廻。冬に至り、寒気を防ぐため、人は好んで火を使う。よって失火あるを恐れ、用心のため村々家々で 火を盛んに使うのを禁じる掟があったのだろうか」とあるが、同書の編纂された一七一三年にはすでにカママーリの夜が火を禁じる精進の夜であったということは忘れられていたことがわかる。

②③⑥からはこの行事が人々にどのような行事と認識されているのかをあらわしている。家並み順ではなくヤーモトから行われることといい、新宗教の家や喪中の家は参加しないことからカママー

りは神行事と同じ扱いであることがわかる。だから、部落の役員は神行事の始まりにはつきもの夕チグシンをいただいで、カママーリを始めたのであろう。

④⑤からは、カママーリは人家に祈願するのではなく台所のヒヌカンに向かつて祈願するということが確認される。

以上の諸注意の分析からは、かつてカママーリの夜は家の中で火を消して精進しなければならぬ夜であり、カママーリは神行事と同じ扱いであり、実際には台所のヒヌカンに向かつて祈願していることがわかる。

(2) ツエをつく男たちの巡行

夜間、ツエで地面を打つ音は響く。昔は道路が舗装されていなかったもので、かえってズーンズーンと家の中までツエの音が響いたという。さらに、トゥムが力を込めてツエで地面を叩くものだからよけいに音は響く。南部落のトゥムは「できるだけ力を入れてツエを叩くようにする」という。外部落のトゥムも「ツエで叩く役だったが、叩くだけでも腕が疲れた」という。ツエで地面を叩き音を立てながらの集落の巡行には特別の意味があつたようである。

では、カママーリと同じように、ツエの音をさせながら集落を巡行する行事は波照間島には他にないのであろうか。一例として盆の最後の日に行われるイタシキバラが挙げられる。波照間島では旧暦

七月一三日に供物を飾り祖先を迎え、一四日に村をあげての歌と踊りの出し物で祖先を楽しませ、一五日に祖先の霊を送る。²⁵⁾そして一六日がイタシキバラである。昔、イタシキバラでは、老人たちが井戸と溝の掃除をして、ともに歌を歌いツエで打ちながら村を歩き、さまよっているマーザムヌ(魔物)を追い払うことになっていたという(「アウエハント 二〇〇六 三四三」)。勝連文雄氏は、「イタシキバラの日はシマのアクバライであり、年寄りが道路で歌をうたつてドラを叩いてアクバライをする」という。氏はその理由を、お盆には仏を墓から招いてきて、家で供養してお返しするが、このとき身寄りのないホトケ、ガキドモが部落内でうろろしているからだという。現在では勝連文雄氏の語るように、ドラを打ったりして集落の厄払いと浄化を行っているのだが、かつてはアウエハントの記述にみられるように、集落中ツエを打ちながら歩くことよって、集落の魔物を追い払い、集落を浄化するという信仰習俗があったと考えられる。波照間島では、ツエをついて島を巡行することよって島全体を浄化する行事もあった。節祭の夜に行われた島の浄化のための儀礼的な巡行、シイマソージイである。その夜は特別の家の戸主がツエをつきながら従者一人を連れ、東から西まで島を歩いていき、島の浄化と収穫を祈願したという(「アウエハント 二〇〇四 三六九」)。

カママーリの夜は人々にとつて精進の夜であったと述べたが、その夜はツエをつく男たちの巡行によつて集落中を浄化する夜でもあったと考えられる。波照間島では、カママーリの行われる日は御嶽の掃除の行われるミヨクチェの次の日である。つまり波照間島では、ミヨクチェの日は島の聖域であ

る御嶽を掃除して、その翌日の夜はカママリーリによって人々の住む集落中を浄化したと考えられる。

(3) カママリーリと結びついた信仰および信仰習俗

八重山の他の地域におけるカママリーリに関する聞き書きでは、離れの台所であるトゥーラや台所の中に入り（黒島）、あるいは庭先で（川平、大浜）祈願を行ったという。台所、あるいは台所の前の庭先で祈願をするという行為は、結果的には台所の中の竈（今はガス台だが）のそばに置かれたヒヌカンを拝むということになる。カママリーリを経験した勝連隆生氏も「カマドのところにはヒヌカンってあるでしょ。今はコーロだけ置いてあるけど、昔は石を三個、カマド載せられるような格好なんですけど、それを拝んでいただけですよ」と語った。

沖縄の台所のガス台のそばには今でも香炉が置かれヒヌカンが祀られているが、昔は三個の石あるいは土を竈の前に三角形に並べてヒヌカンとしていた。窪徳忠はいわゆるヒヌカン信仰は県下の火まいたは竈に対する信仰と中国の竈神信仰との複合信仰だというのが〔窪 一九七一 三四五〜三四六〕、現在、波照間島の人々の生活の中で台所のヒヌカンはどのような神と考えられているのだろうか。台所のヒヌカンについて崎山千代氏は次のように語ってくれた。

じいちゃん亡くなってさ、仏壇に毎朝、お茶も お水も付けて花活けもして、トートーメーし

てるさ。トートローメーは毎日さ。それからヒヌカンにも線香上げて、「今日、家族がみんな、タビにあるものも、みんながんばって仕事させてくださいね」とお願いする。線香は平たい香をあげる。ヒヌカンはオカマの前に石みつつあるよ。花活けと塩と線香と水と毎日やっている。それから朝ご飯食べる。ばあちゃんの時代はね、毎日ヒヌカンは拝んでいる。今は、人によっては拝まない。拝んでいる人は拝んでいる。香炉も石も茶碗もじいさんの時代のものさ。替えないよ。

この聞き書きからは、毎日、崎山千代氏は亡くなった夫については仏壇で拝み、生きている家族の健康と繁栄についてはヒヌカンに祈願していることがわかる。また、氏の世代は毎日ヒヌカンを拝んでいたことがわかる。ヒヌカンは人々の健康と繁栄を願う神なのである。波照間島の各家庭のさまざまな年中行事では、床の間の香炉とともに台所のヒヌカンが拝され、人々はヒヌカンに家族の健康とその家の繁栄を祈ってきた。ヒヌカンは家の守り神なのである。カママーリの唱えごとの内容は前述したように「今日から一〇月カママーリにあたり、竈の周りを掃除してください」であるが、人々は唱えごとの内容にはあまり注意を払わない。若い人は「短い言葉をなにか言っていくだけ」と評し、年寄りも「ヒノカミに三回やって、上等にやってくださいって言うから帰る」という程度の認識だった。選ばれた二人のものが夜更けにその家のヒヌカンの前で祈願をするという行為は、家人にとつては単なる火の用心の祈願ではなく、その家の人々の健康と繁栄を祈願しているともうつつと考え

られる。勝連文雄氏は、「カママリーでは、火の用心によって炊事場の竈を中心とした家族の健康とホウツク（豊作）を祈願する」と語ったが、この勝連文雄氏の言葉のように、波照間島のカママリーは、ヒヌカンの信仰と結びついて、家の繁栄と家族の健康をヒヌカンに祈願する行事としても受け入れられているようである。

しかし、カママリーはヒヌカンを拜んでいるだけではない。ネガイピトやトウムを務めた方によると、「（ツエで）音を立てることによって寝ている地の神様を起こす」のだという。前述したが、「オッサレーの行事では炊事場にやって来て、火の神、地の神にオッサレーと声を掛け火の用心を願う」（勝連文雄氏）という。実際、ネガイピトは地面の下の方にいる神様に聞こえるように、体をできるだけ地面に近づけ、地面に手をつけて口をあてて願い事を唱える。つまりカママリーにおける祈願の対象は、台所のヒヌカンと地面の下の地の神の両方なので



崎山家のヒヌカン（三個の石はすでにない）

ある。

では波照間島における地の神の信仰とはどのような信仰なのだろうか。²⁶勝連文雄氏によると、波照間島では屋敷の願い、地鎮祭、墓を作るときなど、地面をいじるときはいつでも地の神様にオッサレーと唱えるという。氏の話から推察するに、波照間島では地の神への信仰習俗は家や墓の造営と係わっていて、農耕とは結びついていないようである。勝連文雄氏は「お墓の新築、復元などには地の神に願い事をして、地の神様に地代を払ってからお墓を作る²⁷。地の神様はツンボであるから三声オッサレーを掛ける」と語る。この勝連文雄氏の言葉も、「地の神は地面の下にいる、耳が悪い」、「地の神は土のスーツと下にいて耳が遠いので大声を出してやる」（ツエで）音を立てることによって寝ている地の神様を起こす」という言説と同じである。しかし、カママリーは地面をいじる行事ではない。ではなぜカママリーではツエで地面を強く叩き音を立てて地の神を起こして「オッサレー」と祈願をするのか。この筆者の疑問に対して、集まっていた南・北両部落の役員の方々は明瞭な答えをしてはくれなかった。役員の方々もわからないのである。

ここではカママリーと地の神への祈願が結びついた理由について考えてみたい。勝連文雄氏によると「オッサレー」とは地の神を起こすときに三回唱える唱えごとであるというが、八重山の他の地域のカママリーの唱えごとから考えるに、実際には「オッサレー」という言葉は唱えごとを始めるまえの呼びかけの言葉と考えられる。しかし、波照間島では「オッサレー」と三回唱えて行われる行事も

オッサレーと呼ばれているのである。波照間島でカママーリがオッサレーと呼ばれる理由は、唱えごとの最初に大声で「オッサレー」と三回唱えているからである。つまりカママーリでは唱えごとの最初に、「オッサレー」と三回唱えるから、地の神を呼び出していると考えられるようになったのではないか。ツエで地面を強く叩くのは寝ている地の神を起すためだというが、それはカママーリの行事が地の神の伝承と結びついたためにいわれるようになったことだと考えられる。

ツエで地面を強く叩き大きな音を出すのは、寝ている地の神を起すためではなく違う意味があった。八重山における筆者の調査では、多くの人がカママーリの夜に廻ってくるものはツエでコンコン、ドンドン、ザランザラン、グワーングワーンなどと音をたてたと答えている。伊原間のオッサレーはツエに銅貨をはめ込んでいてザランザランと音を立てたというが、このようなツエの工夫は音をたてることをさらに強調するためのものと考えられる〔古谷野 二〇〇七 一一六〕。かつて八重山では火事が起こる前には火玉がその周辺を飛び回っていると信じられていた。筆者は大浜で、「火事になったらドラを叩いて音をたてて火の玉を追いやった」「火事のあったあと、夜中に箕とかをバンバン叩いた。これをピダマを追うといった」という話をお聞きした⁽²⁸⁾。川平ではゴイサギの泣き声が火事の前兆と恐れられていて、ゴイサギが村の上空を声高く鳴き通るときは、各家で杵で白をコーン、コーンと三回叩いたという。石垣島の四力字でもゴイサギの鳴く夜はあちらこちらで白を叩く音がして、いつとき賑やかになったという〔石垣市史編集委員会 二〇〇七 七四〇〕。このように音を立

てて火事の原因となる火玉を追い払うという習俗があった。しかも音を立てて追い払うのは火玉だけではなかった。前述したが、現在、波照間島のイタシキバラではドラを叩きながら集落を廻り身寄りのないホトケ・ガキドモを追い払い集落の厄払いと浄化を行っている。このような音を立てて集落を浄化する習俗は八重山の他の地域でも見ることができる。西表島の干立では節祭の翌日に集落の厄払いと浄化を行う。ドラ打ちを先頭にして人々が一軒一軒家並み順に集落の全戸を廻る。ドラ打ちのみは庭の中に入り、家の周囲をドラを打ちながら右回りに一周する。真謝永模氏（昭和一七年生まれ干立在住）によると、「節祭には亡くなった方々が共にお祝いしようとの時期にやってくるので魂がうろちよろしている。祭りの翌朝、まだ寝ぼけていて帰らないでここにいるので、いい魂も悪い魂も追い払うためにドラを打って一軒一軒廻って清めの儀式をする」という。火玉や本来帰るべき魂（必ずしもいい意味ではない、勝連文雄氏はこれをガキドモという）などの目に見えないまがましいものは、大きな音を出すことによって追い払えると信じられていたのである。カママーリでツエで地面を強く叩き大きな音を出すのは厄払いと清めの意味なのである。筆者は「集落中ツエを打ちながら歩くことによつて、集落の魔物を追い払い集落を浄化するという習俗があったと考えられる」と述べたが、これらの事例からもうなづけることである。

ここではさらになぜツエで地面を打って音をたてるのかについて考えてみたい。²⁹ 地面を叩いたりツエで突く行事はいたるところでみることができる。南九州では正月行事のハラメウチ、モグラウチ、

ナレナレなどがある。小野重朗は、これらの行事は小正月の来訪神が部落を訪れて、花嫁の接待を受け、閉ざし固められた土を掘棒的な祝い棒で打ち起こし、農耕を始めるための儀礼であると述べている（小野 一九九六 八六・八九）。八重山の事例では、石垣市川平の節祭に現れるマウンガナシがある。³⁰ マウンガナシはミノ・カサ・ツエ（六尺棒）姿で家々を訪れ、庭先で五穀豊穣の唱えごとをした後、家人の接待を受ける。筆者の実見によると、マウンガナシは家で接待を受けた後、後ずさりして庭に下りると、ツエを持ってくると廻ってツエを地面にあて、次に反対に廻ってツエを地面にあてる。これもやはりツエを地面にあてることに意味があると考えられる。ツエを地面にあてる行為には土地の浄化の意味があると考えられるが、マウンガナシの行事の性格から考えると新しい年の豊穣祈願であるとも考えられる。このように、地面を叩く、突くという行為は単なる土地の浄化ではなく豊穣祈願とも結びつく。波照間島のカママーリは節祭のあとと麦と早蒔き粟の播種を始める前に行われる。つまりこの時期は新しい年の豊穣祈願のための精進の時期であり、カママーリは農耕の始まる前の豊穣祈願と結びついた部落の浄化という意味もあつたのではないか。しかし、カママーリと豊穣祈願の関連についてはさらに考察が必要である。

このようにカママーリの行事はさまざまな信仰や信仰習俗と結びついていることがわかる。

5. 八重山でかつて行われていたカママリーと波照間島の事例

ここでは、かつて八重山で行われていたカママリーと波照間島の実際のカママリーとを比較検討してみたい。

(1) 八重山でかつて行われていたカママリーと波照間島の実際のカママリー

筆者は拙稿(二〇〇七)において、聞書きを中心に、「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役」(カママリーのこと…筆者)の行事の主な特徴についてまとめた。それらを参考に、今回の調査で明らかになった波照間島のカママリーの実際とを対比して次に記す。

① 名称

地元の人々は、仮装する役の人とその行事名を、サリサリコンコン(大浜)、オッサレー(川平・伊原間)、バンドツサレー(黒島)と呼ぶ。波照間島ではオツサレーと呼ぶ。

② 行なわれた時期

旧暦の一〇月〜一二月の間に行われる節祭(大浜)や種子取(川平・伊原間)の晩に行なわれた。波照間島では節祭のあとの最初のミヨクチェの次の日、カンパナの晩に行われる。

③ 目的

大浜では、魔除け、村の清め、火の用心、子供の教育と言われたが、その他の地域では目的は竈の見回りや火の用心であったといわれた。波照間島でも火の用心のためといわれる。

④ 伝承

川平、伊原間ではカママーリの理由に、「火の神が昇天するため」を挙げるが、その他の地域では特別の由来伝承はない。波照間島ではカママーリではツエで地面を叩いて地の神を起こし、地の神に祈願をするといわれる。

⑤ 各戸訪問の様子

暗いところに現れる、接待は受けない、土産も貰わない。波照間島も同じである。

⑥ タブー

その夜、家では灯りをつけてはいけない、姿を見てはいけない、返事をしてはいけないと言われた。波照間島も同じである。

⑦ 仮装する役の人

二名一組で、集落の役員がやったといわれるが、本来は巳年（スイソウ・水性）あるいは卯年の男がやったといわれる。波照間島でも本来は巳年生まれの人がやったという。

⑧ いでたち

ミノ・クバガサ・ツエのいでたちである。昔は波照間島でもミノ・クバガサ・ツエのいでたちであったというが、現在では普段着でツエを持つ。

⑨ 集落の廻り方

夜更けにツエで音をさせて歩いたという。波照間島では特に力を込めてツエをたたき、大きな音を響かせた。

⑩ 唱えごと

台所前の庭先、あるいは台所の中で、「サリー、サリー」（大浜）「オッサレー」（川平・伊原間）「バンドツサレー」（黒島）などではじまる短い唱えごとを述べる。唱えごととは「ウカマノマエウマチミスコツサレー」（カマドのまえの火に注意しなさいの意味）「ウマツユーミクシ」（火に注意しなさい）などである。波照間島でも台所の前の庭先でヒヌカンに向かって「オツサレー」ではじまる短い唱えごとが行われるが、八重山の他の地域よりもわかりやすく、使用されている言葉は新しい。

(2) 波照間島のカママーリと八重山の他の地域のカママーリの対比から

今回の調査で明らかになった波照間島のカママーリの実態と八重山の他の地域の聞き書きとの対比から、八重山のカママーリに共通した特徴と波照間島のカママーリの特徴について考えてみたい。

①②⑤⑥⑦⑧⑨の項目からは、波照間島の実際のカママリーの特徴が他の八重山の聞き書きとほぼ同じであることがわかる。つまり八重山のカママリーの特徴は、旧暦の一〇月〜二月の間の特別の行事の夜に行われること、その夜は灯（火）を消す・返事をしないなどのタブーの存在することから精進の夜であったと考えられること、家々を廻る人々はかつては特別に選ばれた人々であり、ミノ・カサ（クバガサ）・ツエのいでたちで、ツエで大きな音をさせて歩いたことなどである。すでに述べたが、特にツエで音をさせることは重要だった。

しかし、③目的と④伝承⑩唱えごとが波照間島の実際では異なっている。まず③の目的について考えてみたい。波照間島ではカママリーは火の用心のためであり、魔除け、村の清め、子供の教育のためとはいわない。これはカママリーが実際に現在も行われていて、「オッサレー、オッサレー、オッサレー、今日から一〇月カママリーにあたり竈の周りを掃除してください」という唱えごとにもみられるように、現在この行事が明確に火の用心として人々に（少なくとも役員には）認識されているからである。

次に④の伝承について考えてみたい。川平、伊原間ではカママリーの理由に、「火の神が昇天するため」を挙げる。つまり、川平、伊原間ではカママリーは「ヒヌカンは年に一回昇天する」というヒヌカンの伝承と結びついている。波照間島では「オッサレー」と三回唱えることによつて地の神を起こす」といわれ「地の神は耳が悪い」という伝承と結びついている。このように、カママリーの行

事はその土地のさまざまな伝承と結びついていることがわかる。

⑩の唱えごとについては、昔は波照間島も「ウマチミスコツサレー」「ウマツユーミクシ」のような唱えごとではなかったかと考えられるが、明治以降の沖縄県下における風俗のヤマト化の奨励、方言禁止政策などによって、カママーリの従来の唱えごとが「改善」された結果、現在ののような文句になったのではないかと考えられる。

まとめとして

以下は波照間島のカママーリについてのまとめと若干の考察である。

カママーリの夜は家の中で火を消して精進しなければならない特別な夜であったと考えられる。かつて波照間島では特別に選ばれた男たちがツエをつきながら集落や島を浄化して歩くという習俗があった。このような習俗と関連してカママーリの行事は受容されたと考えられる。カママーリは御嶽の清掃の翌日に行われるが、これは聖域の清掃の翌日に集落の掃除、つまり集落の浄化をしていると考えられる。

波照間島のカママーリは火の神と地の神に祈願するという。火の神への祈願とは台所のヒヌカンに対して行われる祈願のことであり、カママーリは台所のヒヌカンの信仰と結びついている。波照間島

のカママリーでは地面をツエで強く叩いて地の神を呼び出し、地の神にも聞えるように大声で祈願をするというが、これはカママリーが地の神の信仰習俗と結びついたためである。本来、ツエで音を立てながらの集落の巡行には浄化と清めの意味があつた。しかし、地面を叩く、突くという行為には豊穰祈願とも関連があり、波照間島のカママリーは新しい年の豊穰祈願と結びついた集落の浄化という目的もあつたのではないかと考えられる（しかし、カママリーと豊穰祈願についてはさらに考察が必要である）。このようにカママリーの行事はその地で行われていたさまざまな信仰や信仰習俗と結びついている。

波照間島のカママリーの実際は他の八重山の聞き書きの事例とほぼ同じであつた。他の地域と異なる点は、カママリーの目的、カママリーに付随する伝承、唱えごとであつた。カママリーはその地域の伝承と結びつき、唱えごととも時代の影響で変化してきていることがわかる。

本稿では、火に関する儀礼との関連については台所のヒヌカンへの祈願についてしか報告ができなかつた。今後の課題である。

付記

カママリーの調査を受け入れてくださった波照間島の南・北西部落の総務および役員の方々に謝意を表したい。筆者の調査に対して必ずしも役員全員の方々が賛同してくださったわけではない。調査

に際してはさまざま質問や御意見、さらに苦言を伺った。それに対してこの論考が役員の方々に納得のいくものであるのかは非常に心もとないが、これからも皆様から伺ったご意見を忘れずに八重山の調査・研究に携わっていくつもりである。また勝連文雄氏、勝連隆生氏、崎山千代氏をはじめとする本稿の話者の方々に対して心からの謝意を表す。特に数年間にわたって筆者に波照間島についてさまざまなことを教えてくださった勝連文雄氏に対して心からの感謝をここに記す。

【注】

- (1) 今でもこの行事は拝むだけの形で沖縄の一部の地域で行われている。
- (2) 筆者のその後の調査によると、このようなカママーリは船浮でもあったという。「夜廻ってきて唱えごとをして、木を叩いて帰った。あれは火の用心だった」と船浮出身の婦人(川平在住)が語ってくれた。
- (3) 一七六八年に布達された『与世山親方八重山島規模帳』では、古見、小浜、高那で行われていたアカマタ、平久保、桴海、川平、崎枝で行われていたマユンガナシが禁止されている(石垣市総務部市史編集室 一九九二 六四～六五)。
- (4) 種子取とは実際の種時きの前に行われる神事であり、模擬的な種時きが行われる。節祭はものづくりの正月、昔の正月といわれ、八重山ではさまざまな祭りが行われる。カンバナについては本稿で後述する。
- (5) 「オッサーレの唱えごと」は川平の方言ではない。川平では火のことをウマチではなくてピツという(南風野

雄貫氏 川平老人会長 昭和五年生まれ）といわれた。

(6) 筆者は拙稿「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役―石垣島大浜のサリサリコンコンを中心に―」の中では、川平・伊原間と同じように波照間島のカママーリの掛け声を「オッサレー」と統一して記したが、本論ではやはり波照間島の人々の呼称である「オッサレー」を用いる。

(7) 波照間島に川はないが、牛による踏耕と天水によって米を作った。

(8) アウエハントはシイマフサラについては記している。しかし、島の厄払いの行事であるシイマフサラがはたして農耕儀礼に入るのかという疑問は残る。

(9) 「正月籠廻り」と宮良高弘は訳しているが、この訳は「二〇月籠廻り」と考えられる。

(10) この勝連文雄氏の聞き書きは拙稿（二〇〇七）で報告した。

(11) 氏は勝連文雄氏の長男で、二〇〇八年に南部落のカマンガ―（御嶽の管理者）であった。

(12) 勝連隆生氏はカジマーリアタリといっているが、今回筆者がお聞きしたのはカママーリアタリであった。カママーリの唱え事は多少変化しているようである。

(13) 七三歳過ぎたら「バツリ」といって一切の神行事には参加できないので上納の義務もない。

(14) しかし様子を見てみると、実際には御嶽の井戸の水は汲みに行かないようである。

(15) ただし、年中行事表にはカママーリとしては記されていない。カンバナとしてである。

(16) 勝連隆生氏は、「オッサレーを始める前は、部落の会館でお酒をいただいて手を合わすだけです。昔の人は

何か行つたかも知れないけど、僕らはお酒を飲んでお願いして出るんですよ。沖縄ではタチグシンといって神行事のときは必ずお酒二本と塩はつきものですか」という。

(17) 本論では唱え(こ)ををする人を勝連文雄氏が使用したネガイピトと統一する。

(18) 母屋の上方の一番座にはブザスケー(床の間)があり、中の二番座には仏壇があり、三番座は日常生活の場であつた。現在では三番座が台所になっているが、「三番座ともいうべき台所は比較的最近のもので、本当の台所は敷地の西の離れ屋、トーラであつた」という(「アウエハント 二〇〇六 八三」)。

(19) スーイベとは白い位牌のことで、死人が出て四九日以内の家では仏壇にはまだ位牌を載せないというきまりがある。

(20) 道路の街灯や家の庭や車庫の外灯などは点いているが、これらは点いてもかまわないという。あくまでも室内の灯りにこだわるようである。

(21) ネガイピトはおなかのそこから大声を出すので終わった後は気分は爽快だつたという。

(22) 勝連文雄氏によると、ソーズにもさまざまなやり方があつたという。ソーズの一例としてイナアソビがある(勝連文雄氏談)。イナアソビは部落の人が全員浜に下りた。浜でネガイピトが一時半くらい祈願をしている間は全員がソーズといつて横になって静粛に寝ていなければならなかつた。棒を持った係りの人がいて頭を上げる人は棒で叩かれた。

(23) このようなタブーは黒島のカママーリにもある。バンドッサレー(黒島のカママーリのネガイピト)に返事

- をしたらだめだと言われていたが、ある耳が遠いばあちゃんがカママリーの夜、バンドツサレーだとわからなくて返事をしてしまった。その後まもなくそのばあちゃんは亡くなったという（黒島東筋集落の船道憲範氏談）。
- (24) 『琉球国由来記』には、「王城之公事」として竈廻が次のように記されている。
十月朔日竈廻。至于冬、為禦寒氣、每人好火燻。因有過而、失火アランコトヲ恐故、為用心、村々家々、禁熾火之捷、有之者歟（外間 波照間編 一九九七 四二）。
- (25) この夜は奇妙な面を被ったアングマの一人が家々を訪れる。
- (26) 沖縄における地の神の信仰としては、主に農業神としての土地公、土帝君（トウーティークなどと呼ばれる）への信仰がある。しかし、波照間島にはそのような信仰は管見の限りない。アウエハントも「波照間島では地の神はかなり曖昧な性格しがなく、石垣島でみられるように土帝君などという特別の名前もない」と記している（アウエハント 二〇〇四 三一八）。
- (27) お墓の新築は次のように行われた（勝連文雄氏談）。クブツ（供物は、反物、紙、束ねた麻糸、釘などの金物（お金の代わりにする）、米を包んで作った俵などで、これらは年寄りが何名かで作る。お金、ウチカビ、茶碗酒、米を半紙に包んだもの（八十一俵）でお膳の上に九つの盛りを作って、果物などいろいろ飾って地代として供える。三三年忌のお祝いまでの間、こつちに死人を入れないようにとネガイビトが祈願をする）。
- (28) 火事のあったその晩は「火返し」という風習があり、簡単な仮小屋を作り火をつけ、「火玉ドウ、火玉ドウ」

と叫びつつ、水をかけて消火し火玉を部落外に払うという行事があった。火玉追いに合わせて村中の各家ではウスヤソーギー、バケツを一斉に叩き鳴らして火玉を追い払った〔大浜村史編集委員会 二〇〇一 二九二〕。

(29) 折口信夫は、地を打つ行事として、霜月に卯杖・卯槌で土地を叩いて土地の精霊を押さえて廻る儀式があったと述べ、この地を打つ行事が田植えの前にも行われたといい、地を打つ行事と農耕との関連を示唆している〔折口 一九九六 二九九〜三〇〇〕。

(30) 筆者は「ミノ・カサ・ツエの夜廻り役」(八重山のカママーリの行事)とマユンガナシの行事を比較検討して、カママーリの行事はマユンガナシのような来訪神祭祀ではなく、あくまでも神事を模した公事であったと考えられると述べ、公事としてのカママーリを受け入れるにあたって従来から行われていた神事と結びつけてカママーリ行事を行ったことを示唆していると考えられると述べた〔古谷野 二〇〇七 一二二〜一二四〕。

【参考文献】

- 石垣市総務部市史編集室 一九九二年 『石垣市史叢書二 与世山親方八重山島規模帳』 石垣市
- 石垣市史編集委員会 一九九四年 『石垣市史 各論編 民俗上』 石垣市
- 石垣市史編集委員会 二〇〇七年 『石垣市史 各論編 民俗下』 石垣市
- 大浜村誌編集委員会 二〇〇一年 『大浜村誌』 大浜村公民館
- 小野重郎 一九九六年 『増補 農耕儀礼の研究』 第一書房

- 折口信夫全集刊行会編纂 一九九六年 『折口信夫全集二二巻』 中央公論社
- 川平村の歴史編纂委員会 一九七六年 『川平村の歴史』 川平公民館
- 加屋本正一 一九七八年 『波照間島』 加屋本正一
- 窪 徳忠 一九八一年 『南島文化叢書一 中国文化と南島』 第一書房
- 古谷野洋子 二〇〇七年 『ミノ・カサ・ツエの夜廻り役―石垣島 大浜のサリサリコンコン
を中心に―』 『日本民俗学』 第二四九号
- 球陽研究会 一九七八年 『沖縄文化資料集成五 球陽』 角川書店
- コルネリウス・アウエハント 二〇〇四年 『H A T E R U M A ―波照間・南琉球の島嶼文化における社会Ⅱ宗
教的様相―』 榕樹書林
- 那覇市企画部市史編集室 一九七九年 『那覇市史資料篇 第二巻中の七 那覇の民俗』 那覇市役所
- 外間守善・波照間栄吉編 一九九七年 『定本琉球国由来記』 角川書店
- 宮良高弘 一九七二年 『波照間島民俗誌』 木耳社
- 宮良賢貞 一九七三年 『民俗（一） 八重山の民俗芸能』 『八重山の社会と文化』 木耳社
- 湧上元雄 二〇〇〇年 『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』 榕樹書林